

介護老人保健施設

# ほのぼの苑

だより

発行所  
〒018-1401  
湯上市昭和太久保字街道下92-1

医療法人 正和会  
介護老人保健施設  
ほのぼの苑

TEL (018) 877-7115  
FAX (018) 877-7481

ホームページ  
<http://www.seiwakai-akita-no1.or.jp>

編集責任者 加藤稔樹  
発行責任者 小玉敏央

## 謹 賀 新 年



本年も宜しくお願い申し上げます



### クリスマス会

昨年十二月二十三日に、クリスマス会と誕生会が行われました。誕生会では、誕生会の方の生まれた当日の新聞記事や結婚記念日当日の新聞記事を紹介しました。一番古い記事では明治時代の物もありました。昔の人達から見ても、仏教徒が主な日本人にとっては、クリスマスという行事はあまり興味のないものだったのでないかと思っていました。昔の記事を調べていく中で、意外にも十二月二十五日はクリスマスの事について触れられているなど、全く関心がなかったわけではないようでした。もしかしたら入苑者の方の中でも小さい頃は、サンタクロースの存在を信じていた方もいるかもしれません。また様々な時代を生き抜いてきたのだと改めて感じる事ができました。

誕生会の方の紹介が終わると、職員による手作りケーキが登場しました。ケーキには数本のろうそくが立っており、暗闇の中に光っていて、とても綺麗でした。次にクリスマス会の催し物として、職員による楽器演奏をしました。楽器演奏では、何度か失敗してしまい、ハラハラさせてしまった場面もありましたが、皆さんが最後まで優しく見守って頂いたお陰で、最後まで盛り上がる事が出来ました。知っている曲が奏でられると一緒に唄って下さったり、手拍子をして下さったり、楽しんでる様子が見られました。最後には、サンタクロースの服装をした職員が入苑者の方一人ずつにプレゼントを渡していききました。プレ

ゼントが手渡されると、とても嬉しそうなお顔を覗かせて下さったり、中には嬉しさの余り、泣き出す方もおりました。

この行事を通して、クリスマスの気分を味わって頂けたのではないのでしょうか。最後にお忙しい中、お集まりになられたご家族の皆さん、参加して頂いた入苑者の皆さん、ご協力頂きありがとうございます。

(二田 悠子 記)



### バイキング

昨年の十二月八日、昼食バイキングが行われました。今回のメニューはお寿司、天ぷら、手打ちそば、そして入苑者のご家族より秋田名物「ハタハタ」を提供することが決まりました。日頃「ハタハタたぐへなあ」という声が多かっただけに、入苑者の方の、喜ぶ顔が目に見え、嬉しかったです。さらに、ソフト食といって、食事を細かく刻むのではなく、柔らかく煮たり、すり潰したりするなど、出来るだけ食事の形を変えないよう、調理方法に工夫をして頂きました。

朝から苑内は準備で賑やかになり、得意の手打ちそばを練る施設長、学生時代に寿司屋のアルバイトをしていた経験を活かして、寿司を握る男性職員の姿がありました。出上来上がった料理は、どれも美味しそうで、特にぶりがきぎつしりとつまったハタハタの大きさには驚かされました。準備が整い、入苑者の方が続々と食堂へ集まり、沢山の料理が並べられているのを見て、どの方の表情も期待感がいっぱいでした。

十一時半、昼食バイキングが始まりました。我先にと、料理を選ぶ入苑者の姿や、ゆっくりと品定めする方など様々でした。中でもハタハタや寿司は大人気で、すぐに完売してしまいました。また、普段食事が進まず、やむを得ず、経管流動食となってしまう入苑者

の方にも、バイキングメニューを召し上がった頂くことが出来ました。

今回で三回目のバイキングとなりましたが、「食べる」という楽しみは、とても大きな事であり、入苑者の方に一日でも長く、美味しく食べて頂くには、私たちの日頃のケアや観察も大きく関わっていることを感じました。

数日経過した後も「あのハタハタはすごく、美味しかった」と言う声がたくさん聞かれ、皆さんの心に残る非日常の活動になったと思います。二〇〇五年の最後に、入苑者の方の喜ぶ顔を見ることができて良かったと思います。ハタハタを提供して下さったご家族の方、ご協力して下さった皆さんに感謝致します。(保坂 晃子 記)





# 今月の小豆知識

「今月の小豆知識」とは、介護する上でアドバイス等を、豆知識よりさらに細かく、より味わい深い内容で、ご紹介するコーナーです。

## 共同住宅『フレディ』

前号に引き続き、童話『葉っぱのフレディ』の続きを掲載致します。今号でクライマックスを迎えますが、フレディはどのような体験をするのでしょうか。それではご覧下さい。

### 葉っぱのフレディのちの旅〜後編

「さむいよう」「こわいよう」葉っぱたちは怯えました。そこへ、風のうなり声の中からダニエルの声が、途切れ途切れに聞こえてきました。

「みんな、引越しをする時がきたんだよ。とうとう冬が来たんだ。僕たちはひとり残らず、ここからいなくなるんだ。」

フレディは悲しくなりました。ここはフレディにとって居心地の良い夢のような場所だったからです。

「ほくもここからいなくなるの？」

「そうだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて、葉っぱの仕事全部やった。太陽や月から光を貰い、雨や風に励まされて、木のためにも他人のためにもりっぱに役割を果たしたのさ。だから、引越すのだよ。」とダニエルは答えました。「ダニエル、きみも引越す

の？」とフレディは尋ねました。「僕も引越すよ。」それはいつ？「僕の番が来たらね。」

「僕は嫌だー僕はここにいたいよー」とフレディは大声で叫びました。



アルフレッドもペンもクレアもその時、が来て引越していきました。見ていると風に逆らって枝に

しがみつくと葉もあるし、あっさり離れる葉っぱもあります。やがて木は葉を落として、裸同然になりました。残っているのは、フレディとダニエルだけです。

「引越しをするとか、ここからいなくなるとか、君は言っただけれど、それはー」とフレディは胸が一杯になりました。

「死ぬ、ということでしょう？」

ダニエルは口を固く結んでいます。

「僕、死ぬのが怖いよ。」とフレディが言いました。「それとわりだね。」とダニエルが答えました。

「まだ経験したことがないことは、怖いと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化し続けているんだ。変化しないものは、ひとつもないんだよ。春が来て、夏になり、秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。

変化するって自然なことなんだ。君は春が夏になる時、怖かったかい？ 緑から紅葉する時、怖くなかったらう？ 僕たちも変化し続けているんだ。死ぬというの、変わるの、一つのだよ。」

変化するって自然なことだと聞いて、フレディは少し安心しました。枝にはもう、ダニエルしか残っていません。「この木も死ぬの？」「いつか死ぬさ。でも、い

のち、は永遠に生きているのだよ。」とダニエルは答えました。



葉っぱも死ぬ、木も死ぬ。そうなる。春に生まれて冬に死んでしまうフレディの一生には、どういう意味があるのでしょうか。う。

「ねえ、ダニエル。僕は生まれてきてよかったのだろうか。」とフレディは尋ねました。

「僕は、春から冬までの間、本当によく働いたし、よく遊んだね。まわりには月や太陽や星がいた。雨や風もいた。人間に木陰を作ったり、秋には鮮やかな紅葉してみんなの目を楽しませたりもしたよね。それはどんなに、楽しかったことだろう。それはどんなに、幸せだったことだろう。」

その日の夕暮れ、金色の光の中を、ダニエルは枝を離れていきました。

「さようなら、フレディ。」

ダニエルは満足そうな微笑みを浮かべ、ゆっくり静かにいなくなりました。

フレディはひとりになりました。

次の朝は雪でした。初雪です。柔らかな真白で静かな雪は、じんんと冷たく身に凍みました。その日は一日中どんよりした曇り空でした。日は早く暮れました。フレディは自分が色あせて枯れてきたように思いました。冷たい雪が重く感じられます。

明け方フレディは迎えに来た風に乗って枝を離れました。痛くもなく、怖くありませんでした。

フレディは、空中にしばらく舞って、それからそっと地面に降りていきました。

その時初めてフレディは、木の全体の姿を見ました。なんてがっしりした、たくましい木なのでしょう。これならいつまでも生き続けるに違いありません。フレディはダニエルから聞いた「いのち」という言葉を思い出しました。「いのち」というのは永遠に生きているのだということでした。



フレディが降りたところは雪の上です。柔らかくて意外と暖かでした。引越し先は、ふわふわして居心地の良いところだったのです。フレディは目を閉じ、眠りに入りました。

フレディは知らなかったのですが、冬が終わると春が来て、雪は溶け、水になり、枯れ葉のフレディは、その水に混じり、土に溶け込んで木を育てる力になるのです。

「いのち」は土や根や木の中の、目には見えませんが、新しい葉っぱを生み出す準備をしています。大自然の設計図は、寸分の狂いもなく、いのちを变化させ続けているのです。

また、春がめぐってきました。

### 1 月の誕生会・行事のご案内

平成 18 年 1 月の誕生会は、お誕生日にご家族の皆様とご一緒にお祝いさせて頂いたり、苑内での記念パレード等の個人誕生会を行います。個人誕生会の様子は、ベッド側の掲示板に掲載致しますので、ご覧下さい。

29日には、苑内初詣やおみくじ、手作り絵馬等を企画しておりますので、ご期待下さい。

1 月行事担当職員一同



一月お誕生日の方々  
おめでと〜うございます。

### 編集後記

月刊発行に切り替わってから、二回目の新年を迎えることが出来ました。今年の抱負としまして、発行日を固定し、定期的に発行していこうと考えております。決まった期日に、「ほのぼの苑だより」がお手元に届くよう頑張ります。

(カ)

### ほのぼの掲示板

#### 面会者の方へお願い

先月もお知らせ致しましたが、インフルエンザ・感染症流行の時期となっております。入苑者への感染防止のため、風邪・発熱・嘔吐の症状がある方は面会をご遠慮下さいませようご協力お願い致します。また、症状の無い方も手指消毒にご協力お願い致します。



### 幸福

毎年、雪は降るものの、少々我慢すれば生活に支障は見られない。しかし、昨年十二月から大雪と雪下が続いている。一回目の大雪には、体力があったものの、二回目の大雪では、車庫前の除雪にも疲れがあり、すぐに諦め、ほのぼの苑へ初めて、徒歩出勤した。除雪車は、動いているものの、道路は車一台分が走れる程度の道しかついていない。車も殆ど走っていない。生活用道路を歩いていると、何故か農道へ抜ける道の除雪がすこぶる良いのが目に入った。確かに、一回目の大雪の際、通学路でもある農道の除雪が、先にされ、住民から生活用道路を優先させるようにと、町内会の臨時の話し合いにも出た。迷いはあったものの、自然に私の足は、農道へ向かって行った。除雪され、快適な道を五〇メートル程度進むと、ようやく通学路となっていた農道に出たのだが、周囲を見て、愕然とした。

私の目の前には、道はなく、真っ白な大雪原だけが広がっている。小学校の体育館が肉眼で確認でき、一・五キロ位である。進むのも、戻るのも大変で、意を決し、私は冒険家へと変わった。  
腰までの雪に埋まりながら、点々と並ぶ電信柱を目印に少しずつ、確実に前進する。五〇メートル程度進むと、雪に体力を急激に奪われ、足も上がらなくなってきた。映画「八甲田山」、「植村 直巳物語」が脳裏をよぎる。そして、生命の危険を感じた。このまま進んでは、雪に埋もれてしまう為、一回目の大雪の除雪の際、道路脇にできた二メートルはある雪壁の上を歩くことにした。バランスを崩し、転びながら、しかし着実に進み、ようやく小学校の前に出た。  
まだ一月なので、冬は続くが、全国で大雪の為に死者も出ていることから、例年の思い込みで雪と戦うのは、危険である。無理をせず、自然と冷静に付き合え、怪我、事故に遭わず、春を迎えたいと思う。